

M241215（第一）

「飼葉桶に」
ルカ 2：1－12

○導入

6日間働いた後、7日目が安息日とされたように、めぐみ教会の牧会スタッフには、働きの7年目に、その後の働きのための有給休暇、「サバティカル休暇」がもらえます。あまり聞きなれない言葉かもしれませんが、聖書に出てくる「安息日」を意味するラテン語が由来となっていて、1880年にハーバード大学で始まり、1990年代から様々な国の企業や大学に広がっていったそうです。

今年で7年目になるのが、私と洪先生だったので、この夏私もサバティカル休暇をいただき、リチャン先生ご夫妻のいるネパールと、私の親戚や、鮮干先生ご夫妻、テバン教会やオンサラン教会の皆さんのいる韓国に行くことができました。そして、ネパールではチャウタリコミュニティチャーチ、韓国ではテバン教会と、両教会の会堂建築の様子を見てくることができました。テバン教会の会堂建築の様子は、先週の礼拝の中でヒムチャン先生が説明してくださいましたね。

建物だけではないですが、デザインを通して、それをデザインした人の意図や会社の理念やビジョン、力を入れている働き、また価値観などが伝わってきます。なぜなら、デザインとは、計画や意図、考えを可視化したものだからです。

では、創造主であり、救いの歴史を始められた主権者なる神様がデザインされた、イエス様の誕生という歴史に、どんな救いのご計画や福音のメッセージや神の国の価値が含まれているのでしょうか。特に、飼葉桶に寝むるみどりごイエス様とは、私にとってどんな意味があるのでしょうか。一緒にみことばから発見していきましょう。

では、本日の聖書箇所をお読みします。新約聖書ルカの福音書 2：1－12のみことばです。お読みします。ルカの福音書 2：1－12

- 1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。
- 2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。
- 3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。
- 4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

- 5 身重になっていた、いなすけの妻マリアとともに登録するためであった。
- 6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、
- 7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
- 8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。
- 9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
- 10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。
- 11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

○アウグストゥスの勅令から（1－2節）

1－2節を見ますと、全世界の住民登録という皇帝アウグストゥスの勅令から今日の内容は始まっていきます。アウグストゥスというのは「尊厳者」を意味する称号で、彼の名前はオクタビウスで、ローマ帝国の初代皇帝となった人です。義理の父ユリウス・カエサルが暗殺された後、ローマは内戦状態になってしまいます。その内乱をこのオクタビウスが終わらせ、平和をもたらしたので、彼が皇帝となったことを人たちは「福音」と呼んだり、平和の君や救世主とも呼んだりしていたそうです。また、義理の父カエサルがローマの元老院から「神」と宣言されていたので、アウグストゥスは「神の子」とも呼ばれていたそうです。

なんと父なる神様は、イエス・キリストと全く同じような称号で呼ばれていた初代ローマ皇帝アウグストゥスの勅令を通して、本当の平和の君、救世主、神の子であるイエス様誕生の歴史、救い主誕生の約束の成就をスタートさせます。そして、この福音書の著者ルカは、この2人を対比させ、私たちの目を本当の平和の君、救世主、神の子であるイエス様へと向けさせるんです。

全世界の人口調査。その目的は徴税と徴兵のためです。大規模で手間のかかることですが、権力や自信の現れでもあるアウグストゥスの勅令に従い、全ての人たちは動き出し、それぞれの故郷へと帰っていきます。そして、その中にヨセフとマリアもいたと4－5節に記録されています。

住民登録は家長である男性だけでも良かったでしょう。マリアは身重でしたし。でも一緒に行きました。きっとナザレでは、マリアへの誤解や良くない噂などがあり、居場所がなく、頼れる人もなく、マリアを置いていくには不安があったのだと想像します。

なので、ヨセフはマリアを連れて、ナザレからベツレヘムへと移動します。その距離はおよそ150km。しかも、ナザレの標高は400mですが、ベツレヘムはもう少し標高が高く775mほどです。ナザレよりも丘の上にある町でした。

ここ土浦めぐみ教会から、亀有まで大体51kmで徒歩だと16時間かかるとナビで出てきました。1日50km移動して3日なので、妊婦のマリアとの旅路はもっとかかったと思います。でも、ヨセフはその間ずっとマリアを守り、すぐそばでマリアの居場所となり、御使いからのイエス誕生の知らせや、知っていたメシア預言の約束を信じて、彼らは移動したのではないのでしょうか。彼らはアウグストゥスの勅令で動いているように見えて、実はそれをも用いられる神様に、そして、みことばに従って、みことばに導かれて行ったのです。「中心には神様がおられる」これが私たちクリスチャンにとって大切な歴史観であり、世界観であり、視点です。私たちの歩みも主のご計画と御手の中にあることを信じ、私たちも、歴史の主人公であられる神様を発見し、従い歩む者と、みことばの成就となっていく者とされたいと願います。

○イエス様の誕生（6－7節）

6－7節で、いよいよ救い主イエス様の誕生の記録が出てきます。全知全能なる父なる神様が、全人類を救う救い主を歴史という舞台にいよいよ登場させますが、神様の歴史のデザインに驚きです。なんと救い主は生まれて飼葉桶に寝かせられているのです。

良くイエス様の降誕劇で、どの宿屋にも空きがなく馬小屋でマリアがイエス様を産むシーンが描かれていますが、この当時のイスラエルの家々の造りはこのようになっていたとTCUの聖書考古学の授業で知りました（イラスト参照）（1玄関 2中庭 3リビング 4キッチン 仕事場 5屋上 6家畜小屋）。

レンガ作りで、屋上つきの2階建てや平家。家畜も貴重で、外で飼うと盗まれる場合もあるので、家の中で飼われることが多かったそうです。この写真だと玄関から入ってすぐ右が家畜小屋ですね。そして家ごとに、お客をもてなすゲストルーム的なスペースがあったそうです。

私も韓国に行く時は、良く親戚の家で過ごします。今回も行くと言ったら、母のすぐ上のお兄さん、私からしたらおじさん夫婦が、家に私のスペースを準備してくれて過ごしました。4節にヨセフがダビデの家系であり、ダビデの町に帰ったとあるので、親戚の家を訪れたのではないかと思うんです。でも、人々がみなそれぞれの町に帰った時期だったので、マリアが妊婦だったにも関わらず、その親戚の家にはもう空きスペースがなく、家畜小屋しかなかったのでは。つまり、エリサベツに会いに行った時とは違ってあまり歓迎されなかったのではと想像します。そして、6節に「彼らがそこにいる間」とあるので、着いてすぐではなく、何日か過ごしてマリアはそこでイエス様を出産したと思うんです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、きれいに体を洗ってもらい、綺麗な布でくるまれ、そして綺麗で衛生環境の整った場所に寝かされます。生まれてくる環境や状況によっても違いはあるかもしれませんが、飼葉桶、家畜たちのご飯を入れる場所に寝かせたりはしないと思います。しかも石でできた冷たい飼葉桶です。ここには王の誕生という華やかさも、喜びのにぎわいもなければ、温かさありません。ただあるのは、誰にも歓迎されず、救い主を迎え入れるスペースがどこにもない現実だけです。

ヨハネの福音書 1:11

「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」

イエス様を受け入れない人たちの様子が書かれています。イスラエルの民たちが長年待ち望んでいた、自分たちを救ってくださり、自由と平和を与えてくださるメシアなのに。その理由は、誰一人として、自分たちの救い主が暗く冷たく汚い家畜小屋で生まれ、飼葉桶に寝かされるとは、想像もしていなかったから。自分たちの理想と現実が結びつかなかったわけです。

人たちにとっては、イエス様よりもアウグストゥスの方が、自分たちの理想の救い主に近かったし、基準となっていたのです。私たちはどうでしょうか？「主が必要です。救いが必要です。」と言いながら、私たちは、ピリピ2章にあるように、私たちのために、神の御姿であられるのに神としてのあり方を捨て、ご自分を空しくし、しもべの姿をとり、私たちと同じようになられ、自らを低くされ、飼葉桶にまで横たわられたイエス様を歓迎し、受け入れているか。イエス様がくださる言葉ではなく、自分が聞きたい言葉を求めているか。そして、救い主が目の前にいるのに気づけているか今日の箇所から問われます。

○飼葉桶に寝ているみどりご＝私たちのためのしるし（8－12節）

ルカは、この2章で、三度も「飼葉桶の中に」を繰り返して、この飼葉桶に寝ているイエス様こそ、私たちの救い主だということを強調しています。

では、なぜ神様は、ひとり子イエス様の誕生をこのようにデザインされたのでしょうか。神様がイエス様を飼葉桶に寝かしたことは、私たちにとってどんな意味があるのでしょうか。

私は、イスラエルの家の造りを見て、私たち人間を表しているように思えました。皆さんはどうですか？人に見せられる部分、人を受け入れられるきれいなスペースもあれば、人には見せられない、言えない、普段は蓋をしているような、家畜小屋のような暗く冷たく汚れたスペース。罪、自分中心、傷、痛み、怒り、不満、恐れなどでいっぱい、みすぼらしく悲惨なスペース。きれいにしようにも自分ではどうもできないスペースが、誰しもあるのではないのでしょうか。

でも、今日の箇所は、まさにそこに。私たちの一番低いところ、私たちのみすぼらしく悲惨なところに罪を赦すために十字架に身代わりにかかって死んでくださる救い主として。もう自分中心ではなく神様を中心に生きられるよう私たちの王として。傷を癒す癒し主として。怒りを喜びに。不満を感謝に。恐れを平安に変え祝福するために。

今日の箇所、イエス様の誕生の箇所を通して、神様は私たちに、イエス様が希望となれないところはなく、光として照らせないところもなく、いのちとして生かすことのできない人はいないことを私たちにを見せて、教えてくださっています。光が一番目立ち、輝き、本領を発揮するのは、暗闇においてであるようにです。

ネパールに着いて2日目に、午前中は早天祈禱会の後に、教会の工事の進み具合を一緒に見に行ったり、教会の照明選びに行ったりした後、午後にある教会員のお宅にバイブルスタディーに行きました。めぐみ教会という家庭集会です。そのお宅は、家畜や野菜を育てている家庭で、トタンでできた家に住んでいて、イスラエルの家のように、入ったらまず家畜小屋があって、奥に部屋があるような家で、可愛い小学生の娘が2人いる、4人家族の家でした。（写真2枚をPPT1枚に）

そして、家に入るなり、私たちを歓迎してくれ、特等席に座らせてくれ、飲み物や食べ物でもてなしてくださいました。が、リチャン先生から水は飲まない方がいいと日本から来た私にいうほど、私たちの今置かれている環境と比べたら、きれいとは言えない環境でした。

言葉もリチャン先生がところどころ英語で教えてくれる聖書箇所しかわからなかったですが、それでも、貧しさや環境にしばられることなく、子どもも大人も喜んでみことばを一生懸命読み、必死にメッセージを聞き、賛美し、祈る姿。イエス様に出会えたこと、救われたことを心から喜んでいる一人一人の姿にびっくりしました。そして、言葉では言い尽くせない感動を与え、それと同時に「私はどうか」という問いで迫ってきました。

そして、イエス様が共におられることの喜びが溢れているその場に私も招かれていることに感謝が溢れました。何にも左右されることのない、天国の前味と喜びを体験し、忘れることのできない1日となりましたし、今日の箇所のみことばを体験し、リアルにわかる時となりました。そして、ネパールでの2週間は、体的には大変な面もありましたが、霊的にはネパールの教会員の方々にたくさん励まされる、生き生きとした時でした。

飼葉桶に寝ているイエス様を見ているマリアとヨセフ、最初は不安だったと思います。本当にこの子が私たちのための救い主、キリストなのだろうか。でも、御使いは羊飼いたちにも11-12節で言っています。飼葉桶に寝ているみどりごが自分たちのための救い主であるしるしであると。そして、羊飼いたちがきて、そのみどりごに向かって礼拝する姿を見て、博士たちが来て、礼拝し、黄金・乳香・没薬を差し出す姿を見て、マリアとヨセフの内にも徐々に神様の約束の成就への喜びが増し、感謝が増し、期待が増していったと思うんです。弟子たちもイエス様を本当の意味で救い主として受け入れるのに時間がかかりました。私たちも時間がかかるかもしれません。でもマリアとヨセフの元に、羊飼いと博士たちを送ってくださったように、神様は私たちのこともイエス様を受け入れられる者へと作り変えてくださいます。

イエス様はすでに私たちの飼葉桶に来てくださいました。そして、今も共にいてくださっています。神様は私たちの心の奥深くに送ってくださったイエス様を通して、私たちを内側から変え、生かしてくださっている最中なのです。

ヨハネの福音書1：4-5

4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

○まとめ

イエス様の光は私たちの内側奥深くを照らしてくれています。私たちが何を信じているか。何を希望としているか。どんな愛に生きているか。何に傷つき、何から逃げているか。何を悩み、どんな罪を抱えているか。どうありたいと願っていて、何を切に求めているか。どこに向かっているか。

私たちというそれぞれの最も暗い闇、飼葉桶に来てくださったイエス・キリストをお迎えし、その光に照らされ、本来の自分を知り、神様の大きな愛で愛されている自分を知り、偉大な神様を知っていくクリスマス。**ガラテヤ人への手紙2：20**でパウロが告白するように、自分の正しさを貫こうとし、自分の言葉を信じ、自分の力を頼る生き方から**「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」**と告白し、そのことを日々の歩みでますます体験し、さらに主に向かって走っていく者、インマヌエルである主と共に生きる者、主を賛美し礼拝する者へと、共に変えられていきましょう。

祈ります。ルカ2：11-12